

氏 名（本籍）	平井 裕也（東京都）
学 位 の 種 類	博士（音楽）
学 位 記 番 号	博甲第 45 号
学位授与年月日	平成 31 年 3 月 15 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項 該当 音楽文化研究科 音楽専攻
論 文 題 目	オペラ《トゥリーモニシャ》におけるスコット・ジョプリンの和声語法「減 7 の和音を中心に」
論文審査委員	主査 教授 徳丸 吉彦 副査 教授 高松 晃子 副査 教授 原沢 康明

論文内容の要旨

本論文は、アメリカの作曲家、スコット・ジョプリン（Joplin, Scott 1868-1917）のオペラ《トゥリーモニシャ *Treemonisha*》（1911）に使用されている減 7 の和音の効果と役割について探究するものである。

ジョプリンは、一般的にラグタイムの作曲家としての名声が注目されるが、芸術音楽の作曲家として認知されるために生涯に 2 つのオペラの創作も手掛けていた。1 作目のオペラ《ゲスト・オブ・オナー *A guest of honor*》（1903）は、実話を基とした政治色の強いものであったと考えられているが、残念なことに楽譜は現存していない。2 作目のオペラ《トゥリーモニシャ》は、台本の執筆、作曲、出版のすべてを彼が単独で行ったものである。つまりこのオペラは、歌詞と音楽の関係をはじめ、あらゆる音楽的出来事を彼自身の意思によるものと考えることができる。よって、このオペラは、彼の芸術的理想が結実したものと考えられるため、本論文の研究対象とした。

筆者が減 7 の和音に着目したのは、次のようなプロセスがあったためである。まず、全体がどのように構成されているかを統一的に把握するため、「タイムライン」により総合的に分析した。ここでいう「タイムライン」は、ヤン・ラルーと大宮真琴が、その著書、『スタイル・アナリシス』で提唱した分析ツールで、一定の長さを単位とした時間軸に音楽的出来事を落とし込んだものを指している。本論文における予備的考察として、①メロディー、②リズム、③ハーモニー、④サウンド（ダイナミクス）、⑤歌詞、⑥音楽用語の 6 つの

チェックポイントを設けて分析を行った。このタイムライン分析の、③ハーモニーのカテゴリにおいて、減 7 の和音の使用頻度が突出していることを発見した。西洋音楽、ことに古典派からロマン派にかけての時代においては一般的に、減 7 の和音は局部的に用いられ、その特殊な響きにしばしばネガティブな意味を付与されてきた。ところがこの作品にはそれが多用されている。それらがオペラの物語の描写や登場人物の心情の変化に関連しているのか、それらに何らかの役割を与えられているのか、あるいは何も表していないのか、検討する価値はあると考えられた。

《トゥリーモニシャ》に多用される減 7 の和音に関する研究は、これまで行われていない。また、ジョプリンの音楽全般については、ピアノラグタイムのリズム研究や、オペラ《トゥリーモニシャ》の楽曲の数小節を対象とした研究等はあるが、オペラ《トゥリーモニシャ》の全曲を対象とした研究は存在しない。そこで筆者は、オペラ《トゥリーモニシャ》全曲を詳細に分析し、そこで多用されている減 7 の和音を抽出することで、それらがどのような役割や効果を担っているかについて考察した。

第 1 章「スコット・ジョプリンの生涯と音楽活動」では、ジョプリンの生い立ちと音楽活動を概観し、彼がいかにしてオペラ作曲を志向するに至ったか、さらに、彼のオペラがどのように評価されたかを明らかにした。まず、ジョプリンに音楽を志す機会を与えたのは、音楽を愛好する彼の家族で、中でも彼の幼少期に熱心に教育した母フロレンスの存在が大きかった。幼少期には教会で音楽に触れ、10 代の頃に通っていた学校 Orr School でも音楽を学んでいた。オペラを作曲したいという彼の情熱には、彼が 9 歳から 21 歳の間に伝統的な和声法や作曲法を師事したドイツ人の音楽教師ユリウス・ヴァイス Weiss, Julius（生没年不明）の存在と、その後さらに高度な和声法と作曲法を学ぶことが出来たジョージ・R・スミス大学での学習が大きく関わっていた。オペラ《トゥリーモニシャ》の全曲の本格的な上演は、ジョプリンの存命中には実現できなかった。

だが彼の死後、約 50 年が経過した頃から見直され、ガンサー・シューラー Schuller, Gunther（1925-2015）が 1975 年の 5 月にヒューストン・グランドオペラで上演して大成功を収めた。そして、10 月からニューヨークのブロードウェイのユーリス劇場 Uris Theatre で公演を続け、3 か月のロングランに成功した。翌 1976 年に「アメリカ音楽に貢献した」という名目により、アメリカ合衆国建国 200 周年記念の特別なピューリッツァー賞がジョプリンに贈られた。

第 2 章「オペラ《トゥリーモニシャ Treemonisha》」では、ジョプリンが執筆した序文やリブレットを基に、《トゥリーモニシャ》の制作過程および内容について記述した。このオペラのテーマは、当時のアメリカにおけるアフリカ系移民社会が持つ古い因習からの脱却で、そこには啓蒙的・道徳的なメッセージが込められている。登場する複数の呪術師が、民衆に迷信を吹き込む悪の象徴として描かれ、古い考え方に囚われている村の状況を変えようとする救世主が、主人公のトゥリーモニシャである。彼女は、白人から教育を受けた村で唯一の人物であり、教育の大切さを唱える。呪術師たちは邪魔な存在である彼女を危

陰な目に遭わせるが、最終的には正義が勝利し、近代的な社会の到来が予感される。ここでは、声域についても考察した。

第3章「オペラ《トゥリーモニシャ》における減7の和音に関する分析」の3-1「分析方法」では、論文全体の着想の出発点となったタイムライン分析について概要を述べた。3-2「減7の和音に関する分析」では、減7の和音の出現回数と使用割合を詳細に調査した。使用割合は、楽曲の長さと同減7の和音の響きの持続の総和を、8分音符を単位にして算出し、前者に対する後者の割合を求めたものである。この分析から、減7の和音が特殊な場面で稀に用いられるものではなく、この作品の中では一般的な語法として広く用いられていることがわかる。広範に見られる一般的な語法の中にはさらなる多様性や特殊性があるのではないかと考え、3-3「減7の和音の書法と役割」で更に減7の和音の種類について検討した。この分析からは、本オペラにおける減7の和音が占める割合が詳細な数値とともに明らかになった。さらに多様な形で現れる減7の和音の役割と効果を明らかにするために、①音楽的な内容、②音楽的な内容に対応する歌詞の内容、③音楽的な内容と歌詞の内容の要素を総合的にみた書法の役割について順に分析を進めた。これらの書法の分析からは、減7の和音を使用することにより特定の単語または文章を強調する場合、ニュアンスを変化させる場合、何も強調しない場合の3種の書法の役割がみられた。

第4章「リブレットと減7の関係」では、減7の和音が物語の進行にどのように作用しているか、という点を議論の中心とした。減7の和音が物語を直線的に推進させるのか流れを変化させるのか、また、肯定的な流れを作り出すのか否定的な意味をもたらすのか、という働きを組み合わせた4つの機能のいずれかを担うのではないかと考えたのである。まず、台本の原文と筆者が作成した邦訳を提示して、登場人物の歌詞のどの部分に減7の和音が用いられているかを明らかにした。つづいて、減7の和音が物語の進行に及ぼす効果を調査するために、歌詞が充当されているすべての減7の和音を座標上に配置した。座標は、前述の4つの機能をそれぞれⅠからⅣの象限に当てはめたものである。この分析から明らかになったことは、第一に、減7の和音が、否定的な感情や物語の流れを変えるためにだけに用いられるのではなく、肯定的な感情や物語を自然に展開する場合でも使用されることである。第二に、基本的な減7の和音も偶成和音による減7の和音も、やはり同じように4つのすべての機能をもっていたことが明らかになった。つまり、この点からも、彼にとって減7の和音はもはや特殊ではないことが理解できる。ここで得られた内容から、ジョプリンが歌詞を強調するために減7の和音を使用しただけでなく、音楽的に変化を生み出すために使用したことが推察できた。このオペラを特徴付けるのは、多用される減7の和音の価値の転換である。この和音は、従来の西洋芸術音楽においては、曲中、局部的に用いられることで、その特殊な響きがしばしばネガティブな要素と結びつけられながら強く印象づけられていた。それに対し、ジョプリンはこの響きを多用することによって特殊性を薄め、むしろこのオペラ全体の「気分」を表すような、一般的な語法へと転換した。彼にとって、減7の和音はもはや怒りや悲しみを表すだけでなく、音楽上のちょっとした

ニュアンス変化や言葉のわずかな強調のために、さらには、特段何も起こらない場合でさえ用いる語法になったのである。オペラというジャンルが新しい語法による新しい作品を得て更新されていく歴史に、この作品が1つの貢献をしたことは間違いないだろう。

博士論文審査の要旨

I. 論文審査の要旨

この論文はアメリカの作曲家・ピアニスト、スコット・ジョプリン Scott Joplin (1868-1917) が 1911 年に作曲したオペラ《トゥリーモニシャ》(Treemonisha) を扱うものである。ジョプリンは 19 世紀末に主としてアメリカ黒人音楽家たちがシンコペーションを多用して作ったラグタイムというピアノ曲の代表的な作曲家である。しかし、彼は当時のアフリカ系アメリカ人としては珍しく、西洋古典音楽の作曲技法を 10 年以上学び、西洋音楽の代表的なジャンルであるオペラの作曲に強い意欲を持ち 2 曲のオペラを作曲した。最初の作品が失われたため、ジョプリンが自分のリブレットによって作曲したこの《トゥリーモニシャ》が彼の唯一のオペラとして伝えられている。

主人公のトゥリーモニシャという名前は、木の下に捨てられた赤ん坊がモニシャという女性に育てられたことに由来する。オペラは、白人から教育を受けた 18 歳のトゥリーモニシャが、アフリカ系移民社会の因習と戦って自分たちの社会を近代化することに成功する過程を描いている。

申請者平井裕也は、この作品の全曲をララー；大宮が提唱した『スタイル・アナリシス』という統一的で総合的な様式分析の方法で分析し、その過程から、ジョプリンの和声語法の特徴として減 7 の和音の使い方を抽出した。減 7 の和音は短 3 度の音程を三回重ねた和音で、古典的な機能และ声法でも使用されるが、それは極めて特殊な効果を狙うものであるため、その使用は限定されている。

申請者はまず、この減 7 の和音の出現回数がオペラ《トゥリーモニシャ》において 779 回に及ぶこと、また、その和音が響いている持続の総和が、オペラ全体の 14%になることを明らかにした。さらに、減 7 の和音の分類、減 7 の和音を鳴らすパートの分類、減 7 の和音の書法の分類等を行い、次に減 7 の和音とリブレットの関係の分析を行った。19 世紀までの減 7 の和音の慣習的な使用法から類推すれば、減 7 の和音はリブレットの示す強い「怒り」や「悲しみ」との関係で使用されると考えられよう。しかし、申請者による分析は、このオペラにおいては、減 7 の和音が歌詞を強調するためだけでなく、音楽構造の変化のために、あるいは特別な効果とも無関係に、言い換えれば、一般的な語法として使用されていることを明らかにした。

したがって、本論文は、スコット・ジョプリンがオペラ《トゥリーモニシャ》で減 7 の和音を多用することによって、オペラというジャンルに新しい音楽語法を導入して、オペラの世界に貢献したことを明らかにした研究として、評価された。

Ⅱ．試問の結果の要旨

申請者平井裕也は平成 31（2019）年 1 月 23 日 14 時から行われた公開試問において、ジョプリンのオペラ《トゥリーモニシャ》に関する博士論文について、減 7 の和音の使用方に焦点を合わせて発表を行った。議論の中心となる和音については、楽譜を提示するとともに、キーボードを使って説明を行った。極めて分かりやすい発表であったため、減 7 の和音についての次のような質問が出された：その持続の計量方法；この和音の書法の分類方法；この和音の和声的解決あるいは連続使用等。また、減 7 の和音がジョプリンのラグタイムでも使われたのかという質問に対して、使われていないことを答えた上で、ジョプリンにとって、この和音がオペラのための新しい語法であったとを説明した。いずれの質問に対しても、誠実に答えた。

その後に行われた最終試験においても、問題に対して誠実に答弁したので、試問担当者は全員一致で「合格」と判定した。